

西洋人女性のスーフイズム実践——イギリスのグラストンベリーの ナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団を事例として

国際ファッション専門職大学
河西瑛里子

要旨

本稿では、イギリスでスーフイズムにかかわる西洋人女性にとってのスーフイズムを実践することの意味を考える。とくに、実践者の語りと日常の実践に焦点を当て、イスラームとの向き合い方にみられる多様性と女性の「自立」や「自己決定」に対する考え方を中心に検討する。

現在、西洋諸国では、ムスリムの人口が急増している。そのおもな要因は、イスラーム国家からの移民の増加であるが、イスラームに改宗する西洋人、関心を抱く西洋人も出てきている。そのような西洋人は一般的にスーフイズムにひかれるとされているが、彼らを対象とした研究は少ない。そこで本稿は、イギリスのグラストンベリーで活動している、スーフィー教団の1つ、ナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団を取りあげ、その中でも注目されることが少なかった西洋人女性メンバーに焦点を当てる。

まず、この教団の概要とグラストンベリーのグループについて説明する。続いて、メンバー5人のライフストーリーを検討し、先行研究で指摘されてきたような、ニューエイジ志向の実践者ばかりでなく、ムスリムであることを自覚し、イスラーム法を熱心を守る人もいるなど、多様性がみられることを示す。その後、女性たちが定期的に交流する場と、女性を保護すべきという考え方に着目して、「自立」や「自己決定」を無批判に称賛せず、他者に頼ることや規律を守るということ、生の受動的側面を肯定している様子を明らかにする。これはネオリベラリズム的な社会のあり方とは異なり、他者との相互作用の中で自分自身の存在意義を確認し、より良い生を目指す姿勢である。最後に、個々の西洋人女性にとって、スーフイズムを実践することは、現代の主流社会への抵抗というより、自由が強調されるあまり、不安定化した現代社会をともに生きていくためのオルタナティブな生き方であることを指摘する。

キーワード

ナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団、西洋人スーフィー、イギリスのイスラーム、
ネオリベラリズム、フェミニズム

1 はじめに

本稿の目的は、イギリス¹⁾においてスーフイズム²⁾にかかわる西洋人³⁾女性に注目して、彼女たちの実践が現代の西洋社会においてもつ意味を考えることである。とくに女性実践者⁴⁾の語りと日常の実践に焦点を当て、イスラームとの向き合い方の多様性と女性の「自立」や「自己決定」に対する考え方を中心に検討し、現代のイギリス社会に生きる彼女たちにとってのスーフイズムを実践

する意味を考えたい。

調査対象としたグループには男性やイスラーム諸国からの移民または移民の子孫である女性もいるが、ここでは成人後にスーフイズムとかかわることを自らの意志で選択した西洋人女性を考察の対象としている。女性に限ったのは、筆者が女性なので女性だけの集まりを参与観察する機会に恵まれたことと、西洋社会とは異なるイスラームの女性像を西洋人女性がどのように受け入れたのかを考えるためである。また西洋人に限ったのは、後

表1 本稿中に出てくるおもな英語読みのイスラーム用語

アラビア語読み	英語読み	英語綴り
クルアーン	コーラン	Quran, Koran
ズィクル	ジッカ	zikr, dhikr
シャイフ、シェイフ	シェイク	Sheikh
シャイフ・ナジーム	シェキ・ナーゼム	Sheikh Nazim
ナクシュバンディー	ナクシャバンディ	Naqshbandiyya

述するように移民ムスリムの研究に比べて、西洋人の実践者を対象とした研究はまだ少ないからである。なお、本稿中でのイスラーム関連の用語は、表1のように現地での英語の発音に従っている。

初めに、イギリスにおけるムスリムの状況と、西洋でのスーフィズムの広がりについて概観する。

1990年から2010年の20年間で、世界のムスリム人口は2.2パーセント増え、15億7千万人にのぼっている⁵⁾。増加のおもな要因はムスリムの高い出生率にあるが、非ムスリム文化圏におけるムスリムへの改宗者の増加もその他の要因として挙げられる。

イギリスでもムスリム人口は急増している。全人口のうちムスリムが占める割合は1950年には0.2パーセントだったが、1970年には1.2パーセント、2010年には4パーセントと増加している [Kettani 2010: 157]。2011年の国勢調査によると、イングランドとウェールズのムスリム人口は4.8パーセントであり、キリスト教徒(59.3パーセント)、とくになし(25.1パーセント)に次ぐ割合である⁶⁾。ムスリムの急増には、第二次世界大戦後の労働力不足を補うためにイギリス政府が推進した移民政策が関係している。当時の移民は旧植民地だった英連邦諸国、とりわけ南アジア出身者が多かった。その中でもイスラーム国家であるパキスタンからの移民により、国内のムスリム人口は急増した [Werbner 2007: 198]。

それでは、西洋人の間でイスラームはいつ

頃、どのようにして広がったのだろうか。イスラームへ改宗した西洋人は、イスラームの中でもスーフィズムを魅力に感じていると指摘されている [Westerlund 2004: 13-14]。スーフィズム以外のイスラームを実践している西洋人もいるが、ここでは一般的傾向をつかむため、20世紀の西洋におけるスーフィズムの展開を北米と西欧を中心にみていく。

西洋における最初期のスーフィズムの活動はインド人のイナヤット・カーン (Inayat Khan) が率いた国際スーフィー運動 (International Sufi Movement) という教団によるもので、この教団は1910年から北米と西欧で活動していた。イナヤット・カーンが元々属していた教団は、スピリチュアルな訓練を達成するために音楽を使ったり、イスラームへの改宗を求めなかったりする特徴があった。西洋で活動する際、これらの特徴を引き継いだため、西洋人実践者の獲得に成功した。イナヤット・カーン自身が設立した教団の特徴としては、男女平等、教えを伝えるための新たな儀式の創出、講演内容への科学、キリスト教、西洋の日常生活の事例や隠喩の取り入れを挙げられる [Genn 2007: 262]。このように西洋人が受け入れやすい形でスーフィズムを提示したことも、成功の背景にあった。

西洋におけるスーフィズムへの関心は、1960年代から70年代に興った対抗文化運動から始まったニューエイジ運動⁷⁾の中で高まっていった。その担い手たちは既存の価値観に代わる新しい何かを求めていた。アジ

アの伝統的な宗教とされるイスラーム、仏教、ヒンドゥーなどは、神秘的とみなされ、高学歴の中流階級をひきつけた [Genn 2007: 259; Howell and van Bruinessen 2007: 6]。ヨーロッパのスーフィズムの状況を概観したディヴィッド・ウェスターlundは、ヨーロッパ人がスーフィズムにひかれた要因として、ヨーロッパでのスーフィズムがヨーロッパ人向けに変容し、男女平等や文化的側面を強調したこと、宗教－神学をオープンにしたことを挙げている [Westerlund 2004: 25]。実際、西洋のスーフィー教団の場合、女性が高い地位に就くこともあり [cf. Scivi 1993; Genn 2007; Draper 2004]、書物、詩、音楽、舞踏といった文化的側面にひかれる知識人や文化人も多い [Westerlund 2004: 24-25]。とりわけ 13 世紀にトルコのコンヤで活躍した神秘主義詩人ジャラルルッディーン・ルーミー (1207-73) の詩は、ポップカルチャーの文脈で人気を博している [Hermansen 2004: 45]。さらに、神秘的な伝統に関心をもつ対抗文化運動の担い手には、その神秘を秘密にせず、明かしてくれるオープンさは魅力的だった。その一方で、オラフ・ハマーは西洋人にとっての「新しい」宗教の中ではスーフィズムはマイナーだと指摘し、その理由として、1) 1893 年にシカゴで開かれた世界宗教会議でのイスラームの代表者は適任でなく、スーフィズムの担当はいなかった、2) 西洋にもたらされた当初のスーフィズムは秘密主義的だった、3) 色眼鏡で見られがちなイスラームと結びつけられる、4) 女性のほうが宗教的ライフスタイルへの関心が高い多くの西洋人女性はイスラームをとて父権的だとみている、の 4 点を挙げている [Hammer 2004: 142]。

つまり、西洋人にとってのスーフィズムは、イスラームという宗教実践というより、「エキゾチック」な文化とみなされ、ニューエイジという文脈で説明されてきたといえる。

2 イギリスの西洋人女性スーフィーの研究に向けて

ここではイギリスのスーフィズム、イスラーム女性の宗教実践という 2 つの視点から先行研究を示し、本稿を位置付ける。

2.1 ニューエイジ志向の西洋人スーフィー

西洋におけるスーフィズムの研究では、西洋人の実践するスーフィズムはニューエイジ志向で、移民の実践するイスラーム志向のスーフィズムとは異なるとして、両者を分けて考えるべきだと指摘されてきた [Hammer 2004: 138; Westerlund 2004: 16]。ヨーロッパのスーフィー、とくに改宗者の中にはイスラームのアイデンティティをもたない者もあるし、多様なものを取り入れる折衷的な姿勢や、組織化の程度の低さと個人主義の傾向が、ニューエイジ運動と類似しているとされた [Westerlund 2004: 17, 32-34]。しかしグローバル化が進む現在、エリート層の若者を中心にニューエイジ的なイスラームへの関心が高まってきているイスラーム国家もある [cf. Haenni and Voix 2007; Howell 2007]。そのため、このような区分分けは不可能という声もある [Howell and van Bruinessen 2007: 16]。だが、この指摘はイスラーム国家におけるニューエイジ志向のスーフィーへの言及であって、イスラーム志向の西洋人の存在についてはまったく触れられていない。

ただし、イギリスではそもそも西洋人のスーフィーが少なく、その研究はほとんどなされてこなかった。西洋人スーフィーが少ない理由としては、イギリスにおけるスーフィズムはエスニック・アイデンティティと結び付いていたため、その広がりや移民コミュニティの内部に留まり、外部にあまり拡大しなかったことが挙げられている [Geaves 2009]。唯一の例外が本稿で扱うナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団であるが、そ

れでも北米やドイツほどは成功しなかった [Geaves 2009: 97]。実際、2006 年の時点で、イングランドとウェールズにおけるイギリス系白人ムスリムの人口はムスリム人口の約 4 パーセントに留まり⁸⁾、ムスリムの中でもマイノリティである。つまり、ロン・ギーヴス [Geaves 2009] やプニナ・ワーブナー [Werbner 2007] など、これまでのイギリスにおけるムスリムの研究は、イギリスに移民してきたムスリムを対象とする移民研究であり、イギリスの白人ムスリムおよびスーフイーの研究はほとんど行われてこなかったといえる。その例外の 1 つ、本稿と同じグラストンベリーのナクシャバンディ・ハッカニーや教団を扱ったイーアン・ドレイパーは、この教団が町の伝説を取り入れたことで、白人たちの間でニューエイジの 1 つとして根付くことに成功したと指摘している [Draper 2004]。本稿では、教団としての取り組みではなく、実践者個々人の生き方や日常生活に即した場面に焦点を当てることで、ニューエイジの枠組みに留まらない西洋人実践者の多様性を示したい。

2.2 「抵抗」するイスラーム女性

続いて、イスラーム社会における女性たちの宗教実践について整理する。イスラームの規範では、女性と男性は本来的に異なる性質や能力をもつので、それを踏まえて別々の権利と義務を与えるべきと考えられており、1 人の人間として両性をまったく平等に扱おうとするフェミニズムのジェンダー観は受け入れられる余地がない [八木 2007: 66-67]。それゆえに西洋では、イスラーム社会の女性たちは男性より劣位に置かれているとみなされてきた。彼女たちは男性社会や西洋社会に対する劣位の存在として、その実践はそれらの社会に対する「抵抗」として理解されてきた。しかし近年ではこのような視点は、当事者である女性たちの声を反映していないとする研究が次々と出てきている。ここでは、と

くにスカーフやヴェールの着用に関する議論をみていきたい。

ムスリムの女性たちが着用するスカーフやヴェールは、西洋的価値観への抵抗という文脈から捉えられてきた。ライラ・アハメドは、イスラーム社会が女性を抑圧してきたことを認めつつ、西洋流のフェミニズムがイスラーム社会に根付かないのは、フェミニズムが植民地主義の歴史を通じて、政治的に利用されてきたからだと指摘する [アハメド 2000: 239-241]。その結果、女性のスカーフ着用の拒否はイスラームの拒否に、着用はイスラーム擁護を意味するようになり、今日、スカーフの着用を自ら選択する女性が増えているのは、信仰心からというより、西洋的価値観に対して、イスラーム教徒としてのアイデンティティを主張するためと捉えられている [八木 2007: 68-70]。

西欧におけるムスリム女性の表象を、研究者はエドワード・サイードの『オリエンタリズム』に倣い、ジェンダー・オリエンタリズムと呼んでいた [アブー＝ルゴド 2018: 257-258]。エジプトのイスラーム電話を調査・分析した嶺崎寛子は、ジェンダー・オリエンタリズムを批判し、都市部の女性説教師や女性ウラマーたちが権威と合法性、正統性をめぐるイスラーム言説にかかる闘争に参入することによって、自分たちのイスラームを作り上げようとしている点、家父長的な一部のイスラーム言説に対して拒否の言挙げをしている点に注目する [嶺崎 2015: 278-279]。同じくエジプトで調査をした後藤絵美も、ヴェールを女性の社会進出と結びつける研究に疑問を呈し、1970 年代以降のエジプトにおけるヴェールの復活について当事者と神との関係性に目を向けることの重要性を示唆する [後藤 2014: 36-37, 266-267]。インドネシアにおいても 1980 年代以降にヴェールをまとった女性たちは増加しており、その背景として、野中葉は彼女たちがイスラーム教徒の義務としてヴェールの着用を捉えている

とし、政府によって宗教が管理されていたスハルト時代とは異なり、多様な主張が認められている証拠だとする⁹⁾ [野中 2015: 192-194]。

イスラーム教徒の女性たちの実践は、単純化すれば、男性に対する女性、西洋に対する非西洋というように、従属的地位に置かれてきたマイノリティの政治的な「抵抗」として説明されてきたが、近年では彼女たちの主体性を強調する研究が増加しているのである。それでは、西洋人女性たちの西洋社会におけるスーフィズムの実践は、どのように理解できるのだろうか。非イスラーム社会である西洋社会でスーフィズムを実践する女性は、文化的、民族的にはマジョリティの側に属するが、女性、非イスラーム社会におけるスーフィズムの実践者、生まれながらのムスリムに対する「改宗者」ということで、三重のマイノリティとして生きていることになる [cf. 工藤 2008]。本稿では、これまで扱われてこなかった、西洋人の女性実践者の実践が、現代のイギリス社会の中でもつ意味について考えたい。

3 調査と調査地の概要

本稿で扱うデータは、2006年4月から2011年9月の間の合計2年3ヶ月のグラストンベリーにおける現地調査、および北キプロス共和国のレフカにおける2009年8月末の4日間の調査で得られたものである。調査方法は、ジッカの参与観察、ラマダーンの時期の夕食会やハッジ終了後の祝い（イード）の時期に行われた祝いの参与観察、実践者へのインタビュー、実践者が運営しているチャリティ・ショップの観察である。実践者とは日常的に町の中でも出会う関係にあり、そのときにも話をし、日常生活の観察をしていた。取りあげた人物の名前はすべて仮名であり、年齢は2010年時点である。

調査地のグラストンベリーはイングラン

ド南西部サマーセット州のほぼ中央に位置する。人口は8932人で、ヨーロッパ系白人が94.6パーセントを占めている¹⁰⁾。紀元前4～3世紀、グラストンベリー帯にはケルト系の民族が住んでいたが、紀元後1世紀前半には外敵の侵入を受け、滅亡したらしい。その後、イングランド南部はローマ帝国の属州となり、グラストンベリーもその一部となったが、ローマ軍の撤退後はケルト系ブリトン人諸部族の部族王国が乱立する。7世紀末にはイングランドの大半が大陸からやってきたアングロ＝サクソン人の支配下に入った。その頃にはすでに、イングランド南西部にはアイルランドやウェールズ由来のケルト的キリスト教の教会があったらしい。そのため、7世紀末にローマからイングランドへカトリックが伝来しても、グラストンベリーはこの地域の土着文化であるケルト文化とカトリックの交流地点であり続けた。その後カトリックの修道院が建設され、中世、このグラストンベリー修道院はイングランドで2番目に裕福な修道院となり、町も巡礼地として繁栄していた。しかし、イングランド王ヘンリー8世による宗教改革の際、1539年に修道院が閉鎖され、町は急速に衰退していく。

この町への再評価が起こったのは、産業革命の反動から自然への賛美とケルト文化への関心が高まった19世紀のことである。当地にはキリストの来訪伝説やケルト文化の英雄アーサー王にまつわる伝説があり、初期キリスト教やケルト文化と結びついたグラストンベリーはロマン主義者や神秘主義思想家をひきつけた。しかし、表面的にはまだ農業と羊皮加工業をおもな産業とする一般的な田舎町だった。

町が大きく変化したのは、対抗文化運動が活発化した1970年頃である。初期キリスト教やケルト文化との結びつきに関心をもったヒッピーたちがグラストンベリーに押し寄せ、ライフスタイルの違いや路上駐車、深夜の騒音などのため、地元民からは不満が噴出

した。1980 年頃からはマーガレット・サッチャーによる福祉予算の削減を含む経済改革のあおりを受けて生まれた「ニューエイジ・トラベラー」、つまりバスなどの乗り物で生活するホームレスがやってきて、さらに大きな問題を引き起こした。

この時期から、ニューエイジ的な事柄に関心をもちつつも、一般人と同じように暮らす、中流階級出身で学歴も高いオルタナティブと呼ばれる人々も移住してくるようになった。当時、グラストンベリーでは主要産業の羊皮産業が衰退し、町の経済が悪化し始めていた。移住者たちは町の中心部にニューエイジ関係の商品や書籍を扱う店を開いたり、代替療法のセンターや宿泊施設を始めたり、イベントを企画したりするようになった。すると、そのような事柄に関心のある人々が町を訪れるようになり、彼らを対象とした観光業を主軸として、町は活気を取り戻し始める。地元民も、経済効果と、かつてのヒッピーやニューエイジ・トラベラーのように問題を起こすわけではないことから、積極的に誘致はしないが、移住者や訪問者は歓迎されるようになった。現在では「パワースポット」もしくはニューエイジの町として知られている。

グラストンベリーではイギリスの 6 大宗教（キリスト教、ユダヤ教、イスラーム、ヒンドゥー、シーク教、仏教）以外の信仰をもつ人の割合が、イングランドとウェールズの中でもっとも高く [Wheeler 2003-2004]、町中でみられる宗教活動も、この規模のイギリスの町にしては多様性に富んでいる。キリスト教多数派として英国国教会、メソジスト、合同改革教会、カトリック、少数派として兄弟団、福音派、エホバの証人がある。他にペイガニズムや女神運動の活動が盛んで、仏教やインド系宗教のグループも小規模ながら活動している [cf. 河西 2015]。いずれも活動の中心は西洋人である。

サマーセット州を含む南西部地方のムスリムの状況を確認しておくと、南西部の全ムスリム人口は 1.5 パーセントとイングランドとウェールズの中でもっとも少ない。その一方で、南西部では全ムスリム人口に対するイギリス系白人ムスリム人口の割合は 8.4 パーセントと全国平均よりずっと高い¹⁾。つまり、ムスリムは少ないが、イギリス系白人ムスリムが多く暮らす地方といえる。さまざまな宗教実践がみられるグラストンベリーにおいては、イスラームも多々ある宗教実践の 1 つ

表 2 グラストンベリーのイスラーム、スーフィズム関係のグループ

	グループの種類	活動場所	活動回数	おもな参加者
1	金曜礼拝 (Islamic Prayer)	貸し部屋、 墓地のチャペル	週 1 回	ムスリム男性 (西洋人、アジア人)
2	スブド (Subud) *1	合同改革教会の会館	週 2 回	西洋人男女
3	スーフィー・ルハニアット教団 (Sufi Ruhaniat Order) *2	町のチャペル、 英国国教会の教会	不定期	西洋人男女 (女性が多い)
4	ゴールデン・スーフィー (Golden Sufi) *3	個人宅(毎回同じ)	週 1 回	西洋人男女 (女性が多い)
5	ナクシャバンディ・ハッカニー ヤ教団	後述	後述	西洋人・アジア人男女

*1 スブド・ジャパンのホームページによると 1901 年にインドネシア人男性が始めた。1957 年にイギリスで活動を開始してから国際化した。

*2 イナヤット・カーンの教団の分派。詳しくは Hermansen [2004]。

*3 インドで、ヒンドゥーのナクシャバンディ教団のシェイクに出会った、ロシア人女性アイリーナ・ツィーディーがイギリスを中心に広めた。ツィーディー自身は、シェイクから改宗を求められなかったため、実践者はスーフィーだが、ムスリムではないと考えている。詳しくは Scivi [1993]、Westerlund [2004]。

として捉えられている。表2に示したように調査時点では、5つのイスラーム関係のグループの活動がみられたが、本稿で取りあげるグループと比べて、他の4つのグループの活動の規模は格段に小さく、町の中でもほとんど知られていなかった。

4 ナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団

ここでは、本稿の考察対象であるナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団と、そのグラストンベリーでの活動、および主要メンバーの属性について説明する。

4.1 教団の特徴

ナクシャバンディ教団は、1200年頃、中央アジアに興った教団で、14世紀に出現した中興の祖バハーウッディーン・ナクシュバンドの名にちなんで、このように呼ばれている〔東長2001: 698〕。ナクシュバンドの死後、イスラーム地域に広がり、現在の中近東、中央アジア、南アジア、東南アジア、東アジアという幅広い地域で盛んになった〔東長2001: 698〕。シャリーア（イスラーム法）の遵守に厳しく、声高に唱えるジッカ¹²⁾ではなく沈黙のジッカが好まれ、苦行は避けられる〔Gall 2006: 113, 116〕。黙誦による心のジッカによる神との合一を目指し、音楽や舞踊を使つての修行、遊行、独居という修行方法を禁じた〔酒井2003: 290; 間野2002: 375〕。つまり、教義には厳しい反面、実践は肉体的な修行よりも精神的な修行を重視しているといえる。

ナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団のシェイク¹³⁾は、シェキ・ナーゼム（Sheikh Nazim）というトルコ系キプロス人である。彼がシェイクになってから、この教団はスーフィー教団の中でも最大で、もっとも国際的な教団の1つになったとされる〔Nielsen, Draper and Yemelianova 2006: 103〕。公式

発表による信者数は世界中で200万人とされるが、この数字はおそらく誇張されている〔Damrel 2006: 118〕。他教団との違いとしては、静かなジッカだけではなく声を出したジッカも行う点〔Westerlund 2004: 19〕や、シェイクへの親近感を感じる人の割合が多い点〔Nielsen, Draper and Yemelianova 2006: 110〕を挙げられる。

Damrel〔2006〕によると、シェキ・ナーゼムはイギリスの直轄植民地だった時代のキプロスのラルカナで1922年に生まれ、下級エジプト植民地行政官の家庭に育ち、イスタンブールで教育を受けた。1945年、ダマスカスでナクシャバンディ教団のシェイク・アブドゥラ・ダゲスターニ（Sheikh 'Abd Allah Daghestani）に出会い弟子になる。その命で1945年からキプロスを拠点に布教活動が始める。1952年にシェイク・アブドゥラ・ダゲスターニの古参の弟子の一家の娘と結婚し、ダマスカスへの移住後、キプロス以外にレバノン、シリア、ヨルダンでも布教活動を行う。1960年にキプロスが独立した際、シェキ・ナーゼムは、その政府が世俗的な合同政権であることに抗議したためメディアから弾劾され、1965年にはトルコ・キプロス行政当局からキプロスを追放されたが、その後もシリアとレバノンで布教活動を続けた。

シェイク・アブドゥラ・ダゲスターニは、1973年に亡くなる直前にシェキ・ナーゼムを後継者に選んだ。この時点をもってナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団は誕生したとされるのだが〔Damrel 2006: 117〕、その際、彼はシェキ・ナーゼムに、毎年ラマダーンの時期の渡英を求めた。イギリス王室はムハンマドとモーゼというイスラームとユダヤの両方の聖なる血筋を引いているので、キリストが再臨するときには必ずイギリスを訪れるし、イギリス王室が重要になるというのがその理由である。そこで1974年、シェキ・ナーゼムはロンドンにセンターをつくり、これ以降、彼はロンドンを拠点として、ヨーロッ

パでの布教活動に力を入れていく。当初、弟子になったのはイギリス在住のトルコ系キプロス人だったが、じきに西洋人も含む多くの改宗者を獲得した¹⁴⁾ [Nielsen, Draper and Yemelianova 2006: 104; Westerlund 2004: 18]。シェキ・ナーゼムはブルネイのスルタンから資金援助を受けていて、1992年にはロンドンの教会を購入し、モスクに改装した(写真1)。

1999年、シェキ・ナーゼムは初めてグラストンベリーを訪れる。グラストンベリー修道院跡の敷地内のある石のくぼみは、キリストの足跡で、キリストがグラストンベリーに来た証拠だという説がある。そのため、彼は修道院を訪れた時に、「ここはイギリスでもっとも神聖な場所だ！ イギリスのスピリチュアルな心だ。なぜ先代のシェイクが、毎年イギリスに行くようにおっしゃったのか、やっとわかった」と叫んだ。そして、ロンドンにいた元秘書の女性(5.1の事例1)のレイ)に、グラストンベリーに移住して、スーフィズムを広めるために店をもつように指示し、自分の弟子たちにも移住を勧めた。グラストンベリーにおけるナクシャバンディ・ハッカニーや教団の活動は、この女性が移住した1999年から始まる。ドレイパーはグラストンベリーでの活動が成功した理由として、イスラームよりスーフィーを強調し、ムスリムへの改宗を強制しなかった点¹⁵⁾と、キリスト

の来訪伝説を巧みに利用した点を挙げている [Draper 2004: 148-150, 152]。

シェキ・ナーゼムは2014年に亡くなるまで、北キプロスのレフカに家族と暮らしていた。2000年代半ばからは高齢のため海外渡航の回数が減り、逆に弟子たちが彼の元を訪れるようになった。レフカにはそのような来訪者のために、寄付金のみで利用できる男女別の宿泊施設が用意されている(写真2)。雑魚寝が基本だが、食事は3食無料で提供される。島内の有料の宿泊施設に泊まる者もいる。滞在中の過ごし方は自由だが、礼拝の時間にはシェキ・ナーゼムの自宅に併設されたモスクで礼拝をする者が大半である。その他の時間は、男女に分かれてシェキ・ナーゼムの自宅敷地内で過ごすことが多い。女性の場合、中庭や台所で食事の準備や片付けをしたり、彼の講義を映像で見たり、彼の娘の講義を聴いたりする。男性の場合、日中はシェキ・ナーゼムが所有する畑で農作業をする人もいる。

筆者が滞在したのはラマダーンの時期だったため普段より滞在者が多く、女性用宿泊施設には約40人、日中を過ごすシェキ・ナーゼムの自宅の女性エリアには約50人の女性をみかけた。出会った人々のエスニシティは、西洋人ではイギリス人、ドイツ人、スペイン人、イタリア人、ボスニア人、南アフリカ人、北アフリカ系ではカナダ在住チュニジア人、



写真1 ロンドンの教会を改装したモスク
(2014年12月12日筆者撮影)



写真2 女性用宿泊施設に滞在する西洋人女性
(2009年7月27日筆者撮影)

アルジェリア系フランス人、アルジェリア系イギリス人、アジア系ではトルコ人、インドネシア系オランダ人、パキスタン系イギリス人がいた。北キプロスとの関係が深いトルコ以外では、エスニシティにかかわらず、所得水準の高い西洋に暮らす人が大半だった。遠方からの訪問には交通費がかかるからだと思われる。

4.2 グラストンベリーにおける活動

グラストンベリーにおいてナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団は、町の中心部に写真3のような「スーフィー・チャリティ・ショップ」¹⁶⁾という店を構えていることから、住人にもその存在をよく知られていて、ふつう「スーフィー」といえば彼らのことを指す。住人からは実践者の人柄や素行が良い点や、チャリティ・ショップを開いていることから慈善活動に熱心という点が評価されていて、イメージが良い。先述したように、シェキ・ナーゼムがグラストンベリーに残るキリスト来訪伝説を重視しているため、実践者たちも町のキリスト教徒に親近感をもっていて、集まりでキリスト教の施設を使うなど教会の人々との関係も良い。なお、実践者たちはシェイクがシェキ・ナーゼムであることは非常に重視していたが、ナクシャバンディ教団の一派である点はそれほど重視していなかった。



写真3 スーフィー・チャリティ・ショップ
(2014年10月9日筆者撮影)

以下、年間行事と定期的な活動についてみていく。年間行事にはラマダーン明けやイード、ムハンマドの生誕祭の祝い（マウリド¹⁷⁾）があり、その他に定期的なジッカが重要とされていた。また、コンサートやワークショップが企画されることもあった。筆者が断続的にこのグループとかかわってきた2006年から2011年の間、活動内容にほとんど変化はなかった。

マウリドやイードは、個人宅や墓地のチャペル¹⁸⁾に集まって祝われる。筆者が2009年に参加した個人宅でのマウリドには15人がやってきた。2009年のハッジ明けのイードには35人、2010年のラマダーン明けのイードには32人が参加した。日常的な実践であるジッカは、神の御名、神を崇める言葉、コーランの章句を何度も詠唱する集まりである。女性だけのものが水曜の昼間に個人の自宅にて持ち回りで、男女混合のジッカ／瞑想会¹⁹⁾が週に1回、決まった人の自宅で行われていた。また、おおよそ月に1回、シェキ・ナーゼムの弟子でもある、あるシェイクがロンドンからやってくるのだが、そのときのジッカは英国国教会が管理する宿泊施設で行われていた。チャペルや宿泊施設は、管理者の好意で参加者からの寄付金のみで利用している。筆者の観察によると、1人あたり50ペンスから1ポンド（約70～140円）を寄付していた。

他の地域で活動している、ナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団の人々との接触は、グループ単位では見られなかった。ただし、グラストンベリー一帯に暮らす実践者は、ロンドンからの移住者が多かったため、ロンドン訪問時にそこでの実践に参加する人はいた。また、他の地域で個人的に実践している人が、個人でグラストンベリーに来て参加することはあった。しかし、世界中のナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団の人々全体で一斉に何かをするということは見られず、定期刊行物の類も見かけなかった。実践している

人々の連絡先や他の地域のグループの連絡先が、共有されることはなく、シェイクへの献金を求められることもなかった。スピリチュアルなつながりとして、毎回ジッカの際にシェキ・ナーゼムの心と自分の心をつなげるように指示されたが、物理的なつながりとしては、毎日ホームページに公開される、彼の講話の動画のみだった。

女性だけのジッカの構成は、11時半から30分ほどの詠唱、イスラームに関する書物の朗読、食事、1時過ぎからの午後の礼拝で、2時前には解散する。筆者は47回参加したが、最大で14人、最小で3人、平均で8.2人が参加していた。男女混合のジッカ／瞑想会は、木曜または日曜の午後8時から始まり、同じく30分ほどのジッカの後に、お茶とお菓子をいただきながらおしゃべりをし、10時過ぎには解散する。筆者は7回参加したが、最大で14人、最小で4人が参加し、平均人数は8.6人である。月に1回のジッカは午後4時から始まり、1時間ほどジッカをした後に、お茶とお菓子をいただきながら歓談する。季節によって、その前後で日没後の礼拝をすることもある。筆者は5回参加したが、最大で39人、最小で19人が参加し、平均人数は30人である。この2つのジッカが始まった経緯は第6章で触れる。なお、イスラームの知識は、ジッカの際にレイを中心とした先輩の実践者から説明を聞いたり、個人で書籍を読んだりして、習得している。唱える言葉は、短いものはジッカの時に耳から覚え、長いものは自宅でアルファベット表記されたものを見ながら声に出して練習する。講師を招いてのコーランの勉強会の開催は確認できなかった。

ジッカや祝いの日程調整をするのは、基本的にはシェキ・ナーゼムの元女性秘書のレイだが、スーフィズムの音楽のコンサートや旋舞などのワークショップは、レイ以外の実践者が個人で企画する。コンサートの出演者はグラストンベリー一帯に暮らすこのグループ

の実践者の中でミュージシャンとして活動している人が中心であるが、イスラームとはまったく関係のない地元の音楽家が出演することもある。ワークショップは、個人的なついでで講師を頼むことが一般的である。コンサートやワークショップは、地元の新聞やフリーペーパーに広告を掲載することもある。

4.3 主要メンバー

先述したように、このグループのメンバーリストは存在しない。なぜなら、来る者に改宗を求めるわけではなく、定期的な献金の義務もないため、そもそも「メンバー」と同定する基準がないのである。連絡手段としてのメーリングリストはあるが、帰国後の筆者のように、めったにこない人も入っているため、メーリングリストの受信者を「メンバー」とすることは実態にそぐわない。そこで、2006年6月～9月、2008年7月～8月、2009年2月～6月、2009年10月～2011年1月、2011年9月の期間で、筆者が参加した合計75回のジッカ（内、女性だけのジッカ47回、混合ジッカ／瞑想会7回、日曜ジッカ21回）や祝いの儀式、夕食会、ワークショップなどのイベントを調査した結果と、参加回数と参加者同士の相互関係から考えて、筆者が特定した2010年の主要メンバーは、毎週のジッカと日曜のジッカやイベントを含む全体が60人、女性だけのジッカ14人、混合ジッカ10人である。それぞれの属性は表3の通りである。

メンバーについて検討すると、全体の人数としては女性41人、男性19人と女性が多いが、混合ジッカに限っては女性3人、男性7人と男性が多い。女性は女性だけのジッカに参加する人が多いことと、第6章で取りあげるシェキ・ナーゼムによる女性の夜の1人歩き禁止令が関係していると考えられる。未成年は、普段は学校に通っているため、毎週のジッカに参加することは少なく、大きな祝い事の時に参加している。そのような未

表3 グラストンペリーのナクシヤバンディ・ハッカニーヤ教団の主要メンバー一覧 (2010年)

本文中の名前	性別	年齢	婚姻	民族	出身	2010年の居住地	学歴	職業	元々の宗教	その他特記事項
レイザ	女	50代	未婚		ヨーロッパ	グラスト近郊	大学	教員→ジェキ・ナーゼム秘書→チャリティ	ルター派→カトリック→無宗教	子供時代をドイツとアフリカで過ごす
リズ♀	女	50代	再婚		イギリス	グラスト近郊	医療系の学校	医療系(退職)	カトリック	
♀	女	50代	独身		イギリス	グラスト	大学	教員(退職)		
♀	女	50代	既婚		グラスト近郊	グラスト近郊	音楽学校	音楽関係	とくになし	
フディア	女	50代	再婚		グラスト近郊	グラスト		福祉系	メイガン	
♀	女	40代	既婚		ヨーロッパ	グラスト		自営業		
♀	女	40代	既婚	●	アジア	グラスト近郊		自営業		親もシェキ・ナーゼムに従う
♀	女	30代	死別	●	アジア	グラスト	大学	主婦	イスラーム	渡英後、改宗ムスリムだったイギリス人と結婚
♀	女	10代	未成年	○	ロンドン	グラスト	カレッジ(在学)	学生	イスラーム	上述の女性の娘
♀	男	10代	未成年	○	ロンドン	グラスト	中等学校(在学)	学生	イスラーム	上述の女性の息子
アイーシャ♀	女	50代	既婚	●	ロンドン	グラスト近郊		主婦	イスラーム	両親はアジア出身、本人はイギリス生まれ
♀	男	50代	既婚		ヨーロッパ	グラスト近郊		自営業	キリスト教	アイーシャの夫
♀	女	10代	未婚	○	ロンドン	グラスト近郊	カレッジ(在学)	学生	イスラーム	アイーシャの娘
♀	女	20代	未婚	○	ロンドン	グラスト近郊		医療系	イスラーム	アイーシャの娘
♀	女	20代	既婚	○	ロンドン	グラスト近郊	中等学校	主婦	イスラーム	アイーシャの娘
♀	男	小学生	未成年	◎	グラスト近郊	グラスト近郊	小学校(在学)	学生	イスラーム	上述のアイーシャの娘の息子
♀	女	20代	既婚	○	ロンドン	グラスト近郊	医療系の学校(在学)	学生	イスラーム	アイーシャの娘
♀	男	20代	既婚	●	ロンドン	グラスト近郊		音楽関係	イスラーム	上述のアイーシャの娘の夫
ローズ♀	女	60代	再婚		グラスト近郊	グラスト	17歳まで	福祉系(退職)	キリスト教	
♀	男	50代	再婚?		グラスト	グラスト		スパー従業員		ローズの夫
グレース♀	女	60代	離婚		イギリス	グラスト		カウンセラー(退職)	キリスト教	
ケン♀	男	40代	既婚		ロンドン	グラスト	医療系の学校	医療系	キリスト教	
ヒル♀	男	40代	離婚		ロンドン	グラスト		代替療法、運転手		
♀	男	60代	再婚		イギリス	グラスト	16歳まで	庭師(退職)、音楽関係	英国国教会→正教	
♀	女	40代	再婚	■		グラスト近郊		自営業		ヨーロッパ出身、イギリス国籍、上述の男性の妻
♀	男	50代			ロンドン	グラスト		エンジニアなど		
♀	女	40代			イギリス	グラスト		福祉系		
♀	女	30代				グラスト		主婦		
♀	女	60代				グラスト		退職		
♀	女	40代	既婚	●	アジア	グラスト		主婦、パート	イスラーム	
♀	男	40代	既婚		イギリス	グラスト		エンジニア	キリスト教	上述の女性の夫、結婚時に改宗
♀	男	10代	未成年	○	アジア	グラスト	大学(在学)	学生	イスラーム	上述の夫妻の息子
♀	男	10代	未成年	○	アジア	グラスト	中等学校(在学)	学生	イスラーム	上述の夫妻の息子
♀	女	50代	既婚		イギリス	グラスト近郊		主婦	キリスト教	
♀	男	50代	既婚		アフリカ	グラスト近郊		音楽関係	キリスト教	上述の女性の夫
♀	女	10代	未成年		ロンドン	グラスト近郊	カレッジ(在学)	学生	イスラーム	上述の夫妻の娘

♀		女	30代	既婚	■	ロンドン	グラスト			主婦	キリスト教	母親は西インド諸島、父親は南米出身
		男	30代	既婚			グラスト			芸術関係	キリスト教	上述の女性の夫
		女	10代	未成年	□		グラスト		中等学校(在学)	学生	イスラーム	上述の夫妻の娘
		女	10代	未成年	□		グラスト		小学校(在学)	学生	イスラーム	上述の夫妻の娘
		男	小学生	未成年	□		グラスト		小学校(在学)	学生	イスラーム	上述の夫妻の息子
		女	幼児	未成年	□		グラスト		幼年学校(在学)	学生	イスラーム	上述の夫妻の娘
		女	60代	離婚	●	アジア	グラスト近郊			退職	イスラーム	スーフィーだが、ムスリムではない(ツィーディー)
		女	60代	離婚		イギリス	グラスト		大学	教員		スーフィーだが、ムスリムではない(ツィーディー)
		女	30代	未婚			グラスト近郊			無職		複数のニューエイジ
アラブ		女	40代	離婚		イギリス	グラスト			無職		複数のニューエイジ
ルース♀		女	30代	未婚		イギリス	グラスト			無職		ムスリムではない
サファイ		女	小学生	未成年			グラスト		小学校(在学中)	学生		ムスリムではない
		女	70代	離婚		イギリス	グラスト			退職		ムスリムではない
		男	50代	離婚		ロンドン	グラスト			代替医療など		ムスリムではない
		女	40代	離婚		イギリス	グラスト			無職		ムスリムではない
		女	60代	離婚		ヨーロッパ	イギリス			退職		
		女	60代	独身		イギリス	イギリス					
		女	20代	未婚			ロンドン					
		男	70代	既婚			ロンドン					上述の男性の妻
		女	70代	既婚			ロンドン					上述の男性の妻
		男	50代	既婚	●	アフリカ	イギリス			会計士	ムスリム	アジア系、アイーシャの娘の義父
		女	50代	既婚	●	アジア	イギリス			主婦	ムスリム	上述の男性の妻、アイーシャの娘の義母
		女	20代	未婚	●	ロンドン	イギリス				ムスリム	上述の夫妻の娘、アイーシャの娘の義姉
		男	10代	未成年	●	ロンドン	イギリス			学生	ムスリム	上述の夫妻の息子、アイーシャの娘の義弟

*略称 グラスト＝グラスト

*薄い色つきのセルはシェキ・ナーゼムを強く信奉している人々、濃い色つきのセルはムスリムだが、シェキ・ナーゼムをそれほど強く信奉しているわけではない人々。

*名前の横の[q]は女性だけのジッカの主要メンバー、[ø]は木曜の混合ジッカ／日曜の瞑想会の主要メンバー。

*二重線内は一家族、三重線内は親族。

* で名前を囲んだ人は、第5章のインタビュー対象者。

*年齢と居住地は2010年12月31日のもの。

*民族：無印 白人、●アジア系、○アジア系と白人のハーフ、◎アジア系と白人のクォーター、■黒人、□黒人と白人のハーフ。

*「民族」、「名前」を除き、不明な箇所は空欄にしてある。元々の宗教が不明である人の大半はキリスト教だと思われる。

成年の大半はムスリムを公言する両親にムスリムとして育てられており、本人もムスリムとしての自覚をもっている。10代以下13人、20-30代12人、40-50代24人、60代以上11人と、40-50代がもっとも多いが、毎週のジッカと比べると、全体のジッカや祝い事のほうが幅広い年齢層が参加している。居住地も同様で、全体のジッカや祝い事のほうが広い範囲からやってくるが、女性だけのジッカではグラストンベリー周辺、混合ジッカの場合は全員がグラストンベリー在住である。これは時間帯が遅いため、遠方に住む人は帰宅時間が遅くなるのを避けようと、参加を見合わせていると考えられる。全体の集まりでは、シェキ・ナーゼムをそれほど強く信奉していない人の参加が多い一方で、毎週のジッカのほうがシェキ・ナーゼムの信奉者の割合が多い。これらのことからグラストンベリーのナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団の活動は、より人が多く集まる活動のほうが、年齢、居住地、シェキ・ナーゼムの信奉度ともに、幅広い層の人が集まる一方で、メンバーの自宅で行われるジッカには、より熱心なメンバーが集まっているといえる。

表3をみると、離婚経験者が多いことがわかるが、イギリスの離婚率は1000人当たり1.9件（2016年）〔総務省統計局〕であり²⁰⁾、離婚率の高さはこのグループに限ったことではない。また医療や教育といったケア職に就く女性が多いが、これもスーフィーに限ったことではない。民族的には白人が35人、アジア系が10人、アジア系と白人のハーフおよびクォーターが9人、黒人が2人、白人と黒人のハーフが4人で、白人の割合が高い²¹⁾。白人の出身国に多様性がみられるのは、欧州連合や旧植民地との関係から、イギリスでは珍しいことではない。サマーセット州の出身者は少なくとも3人で、大半はロンドンなどの都市部からの移住者である。職業や学歴に特徴的な傾向はなかった。西洋人実践者の場合、元々の宗教はキリスト

教だった人が大半だが、キリスト教離れが進んでいるイギリスでは、無宗教に近い環境で育った者も少なくない。家族で参加するのは、核家族単位で12家族36人だが、拡大家族として参加しているのは1組（4核家族、12人）だけである。

なお、主要メンバーが毎回必ずジッカや祝い事に参加するわけではない。1-2回だけの参加者は、地元民や旅行者が店の扉に貼ってあるチラシを見てやってきた人よりも、主要メンバーの家族や友人がメンバーと一緒にやってきた人の方が多かった。

5 「ムスリム」から「スーフィー」まで

続いて、グラストンベリーを拠点として暮らす²²⁾、5人の西洋人女性メンバーがナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団にかかわるようになった背景とイスラーム法とのかかわり方を明らかにし、スーフィズムやイスラームに対する姿勢を検討する。インタビューの際、レコーダーは使用せず、その場で筆記し、帰宅後ノートに書き写した。ラディアとアナへのインタビューは2人の自宅で行ったが、レイ、ローズ、グレースは3人の店番中に行った。なぜなら当人たちが忙しくその間しか時間が取れなかったからである。以下、【 】内の日付は、聞き取りを行った日である。

5.1 西洋人女性実践者のライフストーリー

事例1) レイ（50代）【2009年3月14日】

シェキ・ナーゼムに命じられて、グラストンベリーに移住し、この町でナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団の活動を取りまとめているのが、スウェーデン人女性のレイである。トルコ語やアラビア語も操り、メンバーの間ではイスラームの教えに通じている人だとみなされている。

母親のドイツ人との再婚に伴い、レイはル

ター派からカトリックに改宗したが、大学生の時、当時の風潮に従い無神論者になった。卒業後はドイツの小学校で教師をしていたが、27歳の時、親しい友人を亡くす。その時ムスリムの女性から、イスラームでは人が死ぬことは地上での試練に合格したということなのだから、感謝し喜ぶのだと聞かされたことをきっかけとして、イスラームに関心を抱き、改宗を考え始める。しかし同時に、喫煙、飲酒、恋人などをあきらめられるか悩んでいた。4年後、レイはついに改宗を決め、あるシェイクに従うようになり、シャハーダ（信仰告白）をするのだが、そのシェイクがすぐに亡くなり、スーフィーの友人に誘われて行ったロンドンで、シェキ・ナーゼムに出会う。その時の印象についてレイはつぎのように綴っている。

初めてシェキ・ナーゼムに会った時、エックス線の機械の前に立っているようだった。この人が自分の魂の中までまっすぐ見通せることがわかったし、処方された薬や体現された絶対的現実まで見通せるとわかった。自分の魂の訓練を任せられると信用した。愛のエネルギーで、彼に磁石のように引き寄せられた。²³⁾

レイはすぐにシェキ・ナーゼムに従うことを決める。同年、ストレスから休職を決め、北キプロスでシェキ・ナーゼムの秘書をするようになる。1991年、ロンドンのセンターの世話役となり、1999年、シェキ・ナーゼムの指示により、グラストンベリーに移り、チャリティ・ショップを開く。

調査当時、午前中はシェキ・ナーゼム関係の仕事をして、午後は店番という生活を送っていて、おもな収入源は、かつて教師として働いていた、ドイツ政府からの年金である。彼女は1日5回の礼拝を欠かさず、つねに頭にスカーフを巻いて長い髪の毛を隠し、体の線が出ない服を着て、ラマダーンも厳格に

守っている。また、2011年には念願のハッジを行った。

事例2) ローズ(60代)【2009年3月10日】

レイの店で、ボランティアとしてよく店番をしていたのが、ローズである。ケアホームのマネージャーを退職した後、近くの都市からグラストンベリーに引っ越してきた。彼女の母親は宗教を押し付けなかったため、子供の頃、教会に行くことも少なく、キリスト教の教えを胡散臭く思っていた。しかし、50歳の頃、近所に暮らしていたカトリックの女性が、深刻な病気持ちで子供とも不仲だったにもかかわらず、とても幸せそうで、ローズは信仰のすごさに気づかされる。一時、この女性と一緒にカトリック教会に通うが、他の信者との意見の対立から教会通いはやめ、自分でスピリチュアルな旅を始めるようになる。当時、精神疾患を抱えた人を助けるボランティアをしていたのだが、その人を通して、あるスーフィーの本に出会う。そこに書かれていた、人生やスピリチュアリティへの新しい見方に印象付けられたのだが、この著者はすでに亡くなっていたため、生きているシェイクを求めるようになった。2003年、偶然グラストンベリーのチャリティ・ショップに立ち寄り、レイに出会い、その週の女性ジッカに誘われた。「でも、店の前で待っている時、私、おかしいかもって思った。知らない人に迎えに来てもらって、知らない人の家に行って、知らないことをしようとしていたのよ」と当時の心境を語る。しかし、その3ヶ月後にはシェキ・ナーゼムの暮らす北キプロスに赴いていた。自分の探していたものを見つけたと感じたと言う。彼女は、「このようなスーフィーのグループはイギリス中にいくつかあるし、キプロスにもある。グループを通じたつながりの輪が広がっていて、知り合いの知り合いに会うなど、その偶然さに驚くことがあるわ」と語る。彼女はレイほど厳格ではないが、ラマダーンは守り、外出時は頭

をバンダナで覆い、髪の毛を隠していた。

事例3) グレース(60代)【2009年3月9日】

ローズ同様、レイの店でよくボランティアをしていたのが、元カウンセラーのグレースである。彼女は30代の頃、ひどい事故に遭って、1年ほど体が麻痺するという経験をし、回復後、体の内部から「小さな声」が聞こえるようになった。その後結婚した夫が、イヴン・アラブ協会 (Ivn Arabic Society) に通っていたことから、イスラームと出会い、「ルーミーの詩を読んでもらって、目覚めたの!!」と語る。スーフィズムも含め、イスラームでは、ユダヤ教やキリスト教の聖人も預言者として取り入れられているので包括的と感じ、親近感が湧いた。それから、「小さな声」からサーディ²⁴⁾というスーフィーの師を送られ、毎日の瞑想中にサーディからいろいろなことを教えてもらった。

離婚後、娘のいる街へ引っ越したのだが、そこではスーフィーのグループが見つからず、毎日サーディに生きた師を送ってくださいと頼んでいたら、2005年のある日、シェキ・ナーゼムを師とする男性に出会い、その人に紹介されて、すぐに北キプロスに赴き、シェキ・ナーゼムと面会し、スーフィーになった。退職後、シェキ・ナーゼムのグラストンベリー移住の指示に従って、ここに移住してきた。「なぜシェイクがここにスーフィーを集めようとされているのかはわからないけれど、何かお考えがあつてのことなのでしょう」と言う。彼女も頭にバンダナを巻き、ラマダーンを守っている。しかし、時々孫の世話を頼まれて泊まりに行く娘一家はスーフィズムとは無縁のため、1人だけ断食を守るのは一家に悪いように気がするので、ふつうに食事していると話し、ラマダーンの時期には世話を頼まれるのが億劫だと愚痴をこぼしていた。

事例4) ラディア(50代)【2009年2月22日】

彼女は元々ペイガンで、かつてはペイガン・グッズの店も開いていたのだが、筆者が滞在していたときはベビーシッターや訪問介護の仕事をしていた。改宗のきっかけは、シェキ・ナーゼムの講演会だった。友人から西洋人の女性シェイク、アイリーナ・ツィーディーの本を借りた翌日に、町にスーフィーのシェイクが来ていることを知り、ツィーディーだと思って行ったところ、来ていたのはシェキ・ナーゼムだったのだ。

他の参加者はみんな真剣なスーフィーとして来ているのに、私はペイガンだから……。シェイクが自分のほうを見ないように、願っていた。でも、その時シェキ・ナーゼムに話しかけられて、直感的にスーフィーになっちゃった。まさか自分がムスリムに改宗するとは思っていなかった。

しかし彼女は「私は怠け者のムスリムなの」と笑うように、礼拝については、「1日に5回もしない。2回で十分。一番初めの朝5時の礼拝なんてありえない」と言い、ジッカについても、「初めのうちは毎週行っていたけど、ある時ひどい頭痛がしてきて、毎週ではなく行きたい時に行くことにしたの。ジッカに行かないからといって、その日に家で1人で詠唱なんてしない。やりたいと思った時にする」と話す。髪の毛を隠さずに、外出しているラディアの姿を筆者はよくみかけたが、それでもラマダーンや豚肉とアルコールの忌避はよく守っていた。

事例5) アナ(40代)【2010年9月13日】

アナは子供の頃から、スピリチュアルな事柄に関心があり、20代の頃からいろいろな宗教にかかわってきた。33歳のとき、シェキ・ナーゼムに従う夫を通して、シェキ・ナーゼムを知った。実際に会った時、「その存在の

すごさに圧倒され、体中が震えた」と言うように、強烈な印象を受けた。彼女は自分を認め、助けてくれる絶対的存在として、シェキ・ナーゼムを全知全能のように評する。

シェイクは私たちが良い人間になることを手助けしたがついてる。シェイクのように神聖な人は、すべてこれでいいと言ってくれる。彼は私のことを知っている、あらゆる人のことを知っている。彼は判断せずに、ありのままの私を受け入れてくれる。

しかしアナは、レイのように、シェキ・ナーゼムを唯一の「グル」と考えているわけではなく、南アジアのある女性グルにも強くひかれていた。また、占星術師になるための勉強をするなど、さまざまなニューエイジ的事柄に関心をもっていた。夫の病気、息子の問題行動なども重なり、しばらくの間、スーフィズムから離れていたこともあった。しかし、ロンドンに暮らしていた頃に知り合いだったレイとグラストンベリーで再会したこともあり、2009年に他のグループとの関係は断ち、定期的にかかわるのはこのグループだけにすることを決めた。このグループとだけ、かかわりを保つことにした理由をつぎのように話す。

多くのグループはお金を取るだけだけど、スーフィーは無料なので純粹。ただ集まって、詠唱するだけ。それでいて、助けが必要な時にはただ助けてくれる。(中略) いつもそんなにスーフィーの友達には会わないのに、今日は25分で4人のスーフィーの姉妹に会った。このようにつながり、ただ「ハロー」というだけの関係がすてき。「私たちはみんなつながっている」って感じられることがすばらしい。

アナはラディア同様、外出時でも髪の毛を隠していないこともあったが、ラマダーンにはできるだけ守ろうとしていた。また基本的には肉食主義者であった。

5.2 メンバー間の温度差

それぞれの事例にもとづいて、この教団とかわるようになった理由とイスラーム法とのかかわりについて、明らかにしていく。

正式にムスリムに改宗したレイは、新しいシェイクを探していたときに、シェキ・ナーゼム本人と出会い、従うことを決めている。シェキ・ナーゼムと初めて出会ったときの言葉からも、実際に対面したことが、このシェイクに従う大きな決め手となったことがわかる。レイは「スーフィーであることはムスリムなので、自分はムスリムだ」と公言し、1日5回の礼拝、ラマダーン、アルコールや豚肉の忌避など、イスラーム法を遵守している。

ローズとグレースは、元々スーフィズムに親しんでいて、生存している師がほしいと望んだ結果、出会ったのがシェキ・ナーゼムを師と仰ぐ人々だった。グレースはルーミーの詩という、ニューエイジの文脈で人気がある「エキゾチック」な文化からイスラームに入っているが、文化に留まらず、できる範囲でイスラーム法を守ろうとしている。ローズも同様である。しかしレイとは異なり、イスラームのイメージが強いムスリムを自称するときの声はためらいがちで、西洋人にも受け入れられているスーフィーと自称するほうが楽なようだった。

レイ、ローズ、グレースの3人は、ナクシャバンディ・ハッカニーや教団にかかわるようになってから、グラストンベリーに引越してきていて、グラストンベリーに数あるニューエイジ的な実践の中から、スーフィズムを選んだわけではない。それに対して、つぎの2人はグラストンベリーの多様なニューエイジ的な実践の中から、スーフィズムを選

んだといえる。

ラディアとアナは、ネオペイガニズムやインド系諸宗教など、スピリチュアルな事柄には親しんでいたが、イスラームとの出会いはシェキ・ナーゼムを通してだった。ラディアはグラストンベリーでシェイクに出会っているし、アナは出会ったのは別の街だったが、再開を決めたのはグラストンベリーだった。スーフィーになった理由をラディアはわからないと言うが、このグループだけとはつながりを保ち続けることを決めたアナは、他のグループとは違い、無料で集まって詠唱するジッカと友人の存在を挙げている。この件については、次章で詳しく検討する。2人はシェキ・ナーゼムを尊敬しているものの、シェキ・ナーゼムの写真とインド人女性グルの写真を並べるなど、他のニューエイジ的な信仰を併用したり（アナ）、礼拝は1日2回など独自の形でスーフィズムを理解していたりする（ラディア）。2人ともムスリムであるか尋ねると、否定はしないが、先の3人のように肯定もせず、むしろスーフィーだと考えていて、Westerlund [2004: 13-14] が描いた、イスラームに関心をもつ西洋人の姿に当てはまる。

続いてイスラーム法とのかかわり方をみていく。一目でムスリムとわかる格好をしているのは、レイだけである。それ以外の4人は、外出時にスカーフを外している姿を見かけたし（ラディアやアナ）、おしゃれとしてのバンダナのように巻いて外出する姿も見られた（ローズやグレース）。そのため、妖精の羽を背中につけるなど変わった格好をしている人が多いグラストンベリーでは目立たない。ただし、必ず膝より長い服を着用していた。

礼拝は、レイのように1日5回決められた時刻に行く人もいたが、ムスリムでない人たちと一緒にいるときにはしないなど、大半は無理のない範囲でしていた。ラマダーンも、持病や高齢を理由にしない人もいるが、ほとんどは実践している。ただしグレースのよう

に、断食に対する社会的理解がイスラーム国家ほどはないので、ラマダーン中のイスラームのことをよく知らない友人や家族との付き合い方について悩む姿もみられた。

肉食については、グラストンベリーにハラル食品店はないので、大きな街に用事がある者に購入を頼んだり、町のケバブショップと共同購入したりしている。一方、イギリスでは菜食は健康的という考え方が広がっており、アナのように菜食主義者もいる。他人と食事をするときに肉食を断っても、それほど奇妙には思われないので、菜食主義は実践しやすいと考えられる。少なくとも共食の場では、アルコール類と豚肉の飲食の禁忌はよく守られていた。

チャリティ・ショップの売り上げに貢献したり、直接寄付金を渡したりすることが喜捨につながると考えられていた。イードの際には最低4ポンド（約550円）の寄付金が求められた。

ハッジについては、レイのように行ったほうがよいと考えている人もいるが、キプロスでシェキ・ナーゼムに会うことを重視する傾向にあり、メッカ訪問には関心を示さない者もいた。これは、シェキ・ナーゼムがサウジアラビア王室に否定的見解を示していることに起因している。

以上のように、肉食やアルコール類の回避、服装といった周囲に受け入れられやすい形で実践できるものはそうする傾向があるのに対して、人前での礼拝や他人宅での断食といった、周囲の人に奇異に思われかねない事柄は控える傾向がある。つまり大半のメンバーは、イスラームの実践者が少ない周囲の社会との間に波風を立てぬよう、できる範囲で無理なく実践しているといえる。それはコーランの勉強会やハラル食品店といった、いかにもイスラーム的なイベントや事業を町で行わない点にも表れているだろう。

本節から、西洋人女性実践者はつぎの3通りに分類できる。

- 1) ムスリムというアイデンティティをもち、イスラーム法も遵守する人。(レイ)
- 2) 初めは文化から入ったが、スーフイズム以外の宗教実践には手を出さず、できるだけイスラーム法を守ろうとする人。ムスリムよりスーフイーと自称しやすい。(ローズ、グレース)
- 3) 先行研究で指摘されてきたような、元々ニューエイジ的な事柄に関心があり、その1つとしてスーフイズムに出会った人。独自の解釈や折衷的な実践もみられる。(ラディア、アナ)

6 「自立」しない女性像

本章では、女性とスーフイズムについて考える。まず、女性だけの実践を事例として、この宗教的な実践が、女性たちにどのような場となっているのかを示す。続いて、女性は男性に守られるべきという考え方が現れた場面を検討し、女性の「自立」や「自己決定」に関する考え方をみていく。

6.1 女同士の集い

この集まりは、単に詠唱と礼拝をするだけでなく、不用品をあげたり、情報を交換したりする場にもなっている。そして、時にはメンバーが抱えている問題を話題にして、助言を与える場になる。本章ではまず、2010年5月19日にルースという女性の自宅で行われた女性だけのジッカの後の食事時の会話の様子を事例として取りあげる。その日の参加者は筆者も含めて9人で、事例にはそのうち、レイ、リズ(50代)、アイーシャ(50代)、ルース(30代)、サフィ(小学生)の5人が登場する。

6.1.1 ルース宅でのジッカの昼食時の様子

ルースは、娘が生まれる前はいつも冬をインドで過ごすなど、ヒッピー的なライフスタ

イルを好む女性である。この日の少し前、彼女はグラストンベリーから車で10分ほどの小さな村²⁵⁾の外れに、娘のサフィと引っ越してきた。娘の父親が娘の生活環境を考えて用意した家で、彼が家賃も払っていたのだが、車をもたないルースはとても不便な生活を強いられていた。サフィが転校を嫌がったため、毎日16ポンド(約2200円)かけて、タクシーでグラストンベリーまで通学していた。そのためルースは下校時間までグラストンベリーから離れられず、家事ができずに困っていた。

この話を聞かされた一同は仰天する。リズが「同じ方角の友達はいないの?」と尋ねるが、村内ではなくグラストンベリーの学校なのでいないとルースは答える。「行政からの支援は受けられない?」とアイーシャが尋ねる。彼女の一家もグラストンベリー郊外に暮らしているが、小学生だった末娘のために、行政がスクールバスを手配してくれたと言うのだ。しかし、ルースは、「村の学校に通っていたら、バスを通してもらえるんだけど、グラストンベリーだと無理なのよ」と言う。レイは、アイーシャの孫息子がこの村の学校に通っているからと、娘を転校させることを強く勧める。しかしルースは、この村の学校は1クラスの人数が多すぎると言って渋る。「それに、私、こんな格好をしているし。グラストンベリーなら大丈夫だけど、この村の保護者には受け入れてもらえないと思う・・・」とつぶやく。それに対して、この村に住むレイは、自分はムスリムだが、村の人はまったく問題なく受け入れてくれているから心配することはないと励ます。

ルースはリュックサック1つで、サフィとインドかどこかに行きたいと言い出し、一同は強硬に止める。レイは、家を片付ける、サフィを転校させるなど、物事を整理してから、キプロスなり²⁶⁾、インドなりに行くことにしないと、ますます混乱するばかりだと諭す。その場にいた全員がレイに同意し、止める。ルースは参加者からの助言を聞いてい

る途中で一度、「グラストンベリーにいた時はいろんなことに巻き込まれてしまったけれど、ここに来てからやっとそういうことから離れられた」とポツリと言う。それに対してレイは、「グラストンベリーには、あまりに多くのスピリチュアリティがあるので、自分を強くもっていないと、ただひたすら混乱してしまう」と言う。そしてまたシェキ・ナーゼムとキプロスの話になり、グラストンベリーとは逆に、キプロスにはしっかりとリーダーがいるので、統制が取れていると話す。

6.1.2 他者とのつながり

このように定期的に集まって、おしゃべりができる場の意義は何なのだろうか。このジッカは1999年、グラストンベリーにやってきたレイが始めた。女性がスーフィズムに改宗するにはいろいろな理由があるので、女性だけで集まって話をする機会を設ける必要があると考えたからだ。つまり当初から宗教的要因というより、社会的な意味合いが強かったようだ。日中にするのは、シェキ・ナーゼムが女性の日没後の外出に難色を示したこともあるが、子供のいる母親にとっては、昼間のほうが出やすいことも理由だった。

第5章で取りあげたアナも、ジッカの意義について、「スーフィーの集まりは、集うこと、お互いへの敬意があってよいわね」と述べ、つぎのように続ける。

(息子の) 父親からの助けは期待できないし、むしろ私が彼の面倒も見ている。1人で子育てをするのもとても大変。(中略)このような状況にある中で、時々ジッカに行くことは私には役立っている。私たちはみんな、姉妹や兄弟を、つながりを見つけないのよ。【2010年9月30日】

そして、誰しもが両親との仲が良いとは限らないのだから、家族に相当するつながりを

探し出すことが大切だと言う。

事例では、タクシーでの通学やインド行きという、無謀で無計画な生活を送ろうとするルースに対し、メンバーは助言を与え、助けようとしている。ルースは2009年の夏頃から参加するようになった女性で、改宗したわけではなく、自分に合う宗教実践を模索中といった様子だった。母親とも疎遠で、子育てに悩み、時には学校を休ませて娘をジッカに連れてくる。そんな彼女を、他の女性たちは母親の先輩としてアドバイスをしたり、娘の遊び相手になってルースが1人になれる時間を作ってあげたりしていた。

このように女性だけで集まって女性特有の問題を話すことができる場合は、イスラーム社会では珍しいことではないのかもしれない。しかし、現代のイギリス社会ではそうとはいえない。比較的田舎で、さまざまな宗教実践が見られるグラストンベリーでも、個人宅というプライベートな空間で、誰でも参加でき、ゆっくり話せる場が毎週設けられているのは、このスーフィズムのグループだけである。第5章のアナの発言にあるように無料であるのもこのグループだけである²⁷⁾。他の集まりの多くは月1回しか開かれないうえ、日中に仕事をしている人が参加しやすいように、夜の7時半や8時頃から開催される。そのため、子供のいる母親や、宗教実践に関心がない夫をもつ女性は参加しにくい。グラストンベリーでの昼間の女性のジッカは、このような女性たちにとってアクセスしやすいし、ジッカがない日でも、チャリティ・ショップに行けば、誰かには会える。一方、イギリスの教会は、グラストンベリーも含め、いたずらを防ぐためにボランティアがいる時間以外には閉鎖しているところも多く、いつでも誰かに出会える場にはなっていない。つまり、このグループは、現代のイギリス社会で失われつつある、継続的に相互交流する場を提供することで、他者とのつながりを生み出しやすくしている。

6.2 保護されるべき女性

本節では、調査の中でしばしば話題になった、夜間の女性の1人歩きに対する彼女たちの意見と対応の仕方を事例として、女性の自立に対する考え方を検討したい。

6.2.1 日没後の女性の1人歩き

シェキ・ナーゼムは常々、女性が1人で日没後に外を歩くことを禁止していた。そのため、集まりの後、日が暮れていたら、男性が付き添うか、誰かが車で送ることが原則になっていた。たとえばある集まりのとき、そこから歩いて10分ほどの自宅に歩いて帰ろうとした筆者は、その家の家主であるビル(40代)に車で送るから、片付けが終わるまで少し待ってほしいと言われた。夜の10時を過ぎていたが、筆者は深夜でも1人で歩いて帰宅することは時々あったので、大丈夫だと言って断った。するとその場にいたレイから「お姫さまになることを覚えなさい」と言われた。ビルからも「君が自立した女性であることはわかっているけど、送っていかないと、こっちが落ち着かないんだ」と言われ、渋々そうしてもらった。

ただしイギリスでは真冬は午後3時半には日が暮れるため、この命令を遵守することは難しく、午後8時ぐらいまでならば、それほど厳密に守られてはいなかった。ところが2009年10月末、シェキ・ナーゼムがこの禁止令の厳守を命じているとレイがメンバーにメールで伝えた。それを守るため、毎週日曜日の午後6時から開かれていた男女混合のジッカは中止され、代わりに月1回午後4時から開かれることになった。この変更になんて納得しなかったのが、混合ジッカの主要メンバーであるケン(40代)とビルだった。女性たちには女性だけのジッカがあるものの、男性にとっては日曜のジッカが唯一の実践の機会だったため、それが月1回になることは2人には承服しかねることだった。そのため11月以降、ケンやビルを中心にロー

ズの自宅で毎週木曜日に混合のジッカが、ケンの自宅で毎週日曜日に瞑想会²⁸⁾が開かれるようになった。この2つはメンバーが同じだったこともあり、2010年9月頃からビル宅の木曜の夜のジッカに一本化された。

女性の夜間の1人歩き禁止令の「遵守」に対しては、疑問をもつ女性が少なくなかった。2011年1月のある女性ジッカの日、ローズが木曜日の午後7時からビルの家で、シェイク・アフメドという人が2月に開くワークショップの段取りを相談するから来られる人は来てほしいと参加していたメンバーに伝えた。それを聞いたレイは帰り際に、「みんな聞いて。シェキ・ナーゼムは、夫の同伴なしに女性が日没後に外出してはいけない、とくにイスラム暦の今月はいけないと厳しくお達しを出している。シェイク・アフメドはシェキ・ナーゼムに厳格に従っている人なのよ」と言い、女性はこの集まりに参加しないでほしいと暗に求めた。それに対してローズは、女性を各家まで車で迎えに行くのはどうかとか、姉妹同士での外出ならよいとされているのだから、1人ではなく連れ立ってならよいのではないかと提案するが、レイはまったく納得しない。グレースが、日曜日の月1回のジッカは4時からで、これも帰る時には日が暮れているのではないかと指摘するが、レイは始まる時間に日が暮れていないのでよいのだと言い、グレースは黙ってしまった。

帰りの車中、ローズとグレースはレイに対する不満を爆発させていた。「7時にビルの家に向かうのと、4時からの(月1回の)ジッカに参加することに、何の違いがあるっていうの? どちらも日没後じゃないの」という具合である。そして、車中の全員が、この件について、レイの言うことは辻褄が合わないが、何を言っても聞き入れてくれないので、黙っているのが一番という意見で一致した。

6.2.2 大切な「お姫さま」

グラストンベリーでシェキ・ナーゼムの命

令をその通りに守ることは、独身女性が多いうえ、キプロスより緯度が高いので、現実的に難しい。また、禁じられているのが、歩くことなのか、外出全般なのか、すべての女性なのか、1人での場合なのかは、レイの発言にもぶれがあり、メンバーの間で混乱を招いていた。

もちろん、夜遅くに女性が1人で出歩くことは、イギリスでも一般的に危険で望ましくないとされている。しかし、男性であるシェイクが日没後であれば何時だろうと女性に自宅待機を命じているとすれば、非イスラーム社会のイギリスにおいては、女性の行為の自由を奪っていると理解されるのが一般的である。実際、イスラームとかかわりのない、筆者の家主のイギリス人女性（50代、NPO勤務）にこの話をしたところ、「やはり、イスラームは父権的ね。それなのに、どうしてひかれる女性がいるのかしら」と首をかしげていた。

ところが事例にあるように、外出禁止令に伴うジッカの変更に反対したのは男性メンバーで、女性メンバーは受け入れていた。また、ローズやグレースにしても、レイの解釈の仕方に不満をもっていたものの、外出禁止令それ自体を問題視することはなく、その範囲内で解決策を見出そうとしている。むしろ、夜遅くの集まりの際に男性が女性を車で送っていくことは、女性の権利として当然と考えている発言が聞かれることもあった。つまり彼女たちは、レイの発言のぶれや行動の矛盾に反発はしても、この禁止令自体は受容していたのである。

このように、女性は男性から保護されるべき対象であるという意見はしばしば聞かれた。ある女性だけのジッカの後、レイがした話の要点は、内容が事実かどうかは別として、以下のようなものである。

イスラームの教えでは、女性は夫に養ってもらふべきであり、夫を亡くしたら親に養ってもらふべきなので、働くことは

基本的には望ましくないとされている。アフリカ（のムスリム）には、結婚適齢期を過ぎた未婚女性はおらず、夫を亡くしても、4ヶ月以内には再婚している。男性は4人まで妻を娶ることができるため、女性が再婚相手を見つけることは難しくない。むしろ、1人しか妻のいない男性はとても貧しいか、性的に問題があるとみなされる。複数の妻たちは家事を分け合っているため、それぞれの負担が少ない。このように、女性は大切にされている。【2009年11月25日】

別の日、2010年にトルコを訪れたときに触れたトルコ人男性の親切さについて、アナが話し始めた。彼女は、アイスランドの火山の噴火によって、ヨーロッパ中の空港が閉鎖されたため、搭乗予定の飛行機が欠航になり、帰国できなくなってしまったのである。

帰れないってわかって、困って、泣き続けていた。けれど、ムスリムの男性は女性を保護しなくてはならないと思っているから、空港の人たちは、みんなとても優しく、慰めてくれた。空港が再開してから一番のフライトに乗せてくれた。現金も足りなくなってしまったんだけど、知り合いになったムスリムの男性が貸してくれた。【2010年5月5日】

これに対してレイは、「イスラームでは、女性は大切にされているからね。キリスト教の国では、こういうことは絶対に起こらない」と言い、アナもうなずいていた。この話の間、他の参加者も納得したようにうなずいていて、反論する者、反論したような者はいなかった。このように西洋の一般的なジェンダー観とは異なるイスラームのジェンダー観を積極的に価値付け、女性を男性に守られる「お姫さま」扱いすることは、西洋のフェミニズムが推進してきた、自立的な女性像とは大きく

異なる女性像だといえる。

6.3 他者を頼ることと規律遵守の勧め

ここまで、悩みを分かち合い、助け合うことが評価されている事例と女性を保護すべき存在として捉えている事例をみてきた。前者は近代の西洋社会で失われた人と人とのつながりを希求、後者は西洋的観点からすれば女性差別の温存というまったく異なる文脈で理解されがちだが、他者とのかかわりを積極的に評価しているという点では共通している。

自分だけが独立して、生活していると考えて行動するのではなく、世界をともに共有していると考え、他人を敬って生きていくべきである。【2009年3月25日】

これはある日、店で店番をしていたリズから言われた言葉である。このように彼女たちは、他者に頼らない、自立した個人像を否定し、積極的に他者に「頼る」ことを肯定する。

それと同時に、本章の事例からは、彼女たちが規律の必要性を認めている姿勢が窺える。6.1の事例では、シェキ・ナーゼムがいることで統制が取れているとして、北キプロスのナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団の共同体が評価されているし、6.2の事例でもシェキ・ナーゼムの命令を自分たちの生活とやかに折り合いをつけながら守っていくかで、議論が起こっている。

キリスト教では人が亡くなった時の「レシピ」がないから、いくら敬虔なキリスト教徒でも、悲しみからなかなか立ち直れない。それに対してイスラームでは「レシピ」があるから、立ち直りの助けになる。【2010年4月3日】

これは、継父と小学生の甥が続けて亡くなるという不幸に見舞われたレイが、キリスト教徒である妹（甥の母親）を引き合いに出し

て、語った言葉である。彼女の言う「レシピ」とは、人が亡くなったときに唱えるべき章句等のことを指しているのだが、そのような規律によって人は親しい人を失った悲しみから癒されると考えているのである。

彼女は常々、現在の世の中は個人の自由が主張されすぎた結果、皆がやりたい放題になり、とても混乱していて、人々はどうのように生きたらよいのかわからなくなっている、そのためシェキ・ナーゼムのような「聖なる人」に従うことが必要なのだと話していた。自分自身の考え方や欲求にもとづいて物事を決めたり、物事に対処したりするより、規律に従うことが理想的と考えているのである²⁹⁾。

このように、他者を頼ることや規律の遵守を求める姿勢は、女性の男性への依存を否定し、自立を鼓舞するフェミニズム、ひいては自己責任や選択の自由を推奨するネオリベラリズム的な現代社会のあり方とは異なっている。しかし、翻って考えてみれば、女性を弱い存在と捉え、自立的な個人像や個人の自由を無批判に肯定しない生のあり方を評価するのは、福祉や介護の議論におけるネオリベラリズム的な視座を批判する視点と重なってくる。

障害者や介護施設の高齢者など、他人からの助けなしでは、基本的な日常生活さえ1人で営むことができない人々は、ネオリベラリズムの席卷する現代社会では「厄介者」である。しかし、ラカンやギデنزを介して、吉田〔2009: 69-70, 77-79〕が言うように、人間の「自己」は「他者」との相互関係を通じて構築されていくものであり、そのような関係性が可能となる場がなくては、満たされた生を生きていくことは難しい。介護が必要であるという、根本的な弱さを露呈している障害者や介護施設の高齢者は、そのような受動性を呈しているがゆえに、人と人との相互関係を誘発する存在である。彼らによってその関係に巻き込まれた人たちの「自己」が築かれていくと考えれば、他者の豊かな生を積

極的に満たす場をもたらすという点で、彼らの受動的な生は必要とされてくる。

本章で扱った女性たちは、「自立」や「自己決定」を単純に肯定せず、他者に頼ることや規律を守ることといった、ある意味、受動的な生き方を評価している。これは、受動性を呈する障害者や高齢者のように、他者との相互的な関係性の中で、自分の存在意義を確認し、より良い生を目指す姿勢だといえるだろう。

7 おわりに

本稿では、イスラームに主体的にかかわるようになった西洋人女性たちに焦点を当て、彼女たちのイスラーム実践の多様性と女性の「自立」や「自己決定」に対する考え方を明らかにしようとしてきた。最後に、本稿で提示した論点を整理した後で、イスラーム社会の女性たちの実践と本稿の事例を比較しながら、西洋人女性実践者にとってのスーフィズムとは何かを考える。

第5章では、先行研究で提示されてきたムスリムとしてのアイデンティティ意識が低く、ニューエイジ志向の西洋人実践者だけではなく、ムスリムであることを自覚し熱心にイスラーム法を遵守しようとする西洋人もいたことなど、西洋人の実践者の中にみられるグラデーションを指摘した。スーフィズムとの向き合い方は多様であっても、彼らは1つのグループとしてともに活動が続けている。

第6章では、現代西洋の主流社会が求めてきた自立的な個人とは異なり、他者との関係性の中に組み込まれた生き方が肯定されていることを指摘した。この点について、2.2で取りあげたイスラーム社会の女性たちと比較してみる。主流社会とは異なる価値観を肯定することは、主流社会への挑戦の一形式と考えることはできる。これは、別の形ではあるが、ニューエイジ運動が、現代社会を過度

の合理主義の進展のために行き詰まっていると批判し、精神的により解放された自由な社会を希求するのと同様に、現代西洋社会を批判しているともいえる。しかし、彼女たちは外部の社会に積極的に働きかけて、自らの訴えを認めさせようとしているわけではなく、その働きかけは自分たちのグループの内部で完結している。このように政治的な目的を伴っているわけではないので、本稿でみてきた実践は、イスラーム社会の女性による男性社会や西洋社会への抵抗という文脈では理解できない。また、独自のイスラームを意図して作り出そうとしているわけでもない。むしろ、他者との相互関係の中に自らの存在意義を見出している点に注目すると、個々の西洋人女性にとって、スーフィズムを実践することは、自由が強調されるあまり、不安定化した現代の西洋社会をともに生きていくための生き方になっているといえよう。そしてそれはムスリムがマジョリティである国々とは異なり、イスラーム回帰ではなくオルタナティブな生き方なのである。

本稿ではイスラームの中でも、スーフィズムに関心をもち、実践している、西洋人女性をおもに取りあげた。ここでは、グラストンベリーのグループのみに焦点を当てたが、西洋の都市やイスラーム国家におけるナクシャバンディ・ハッカニーヤ教団や他のスーフィズムの教団の事例と比較すれば、スーフィズムの国際的な活動の実態を示すことができよう。また、本稿で少し触れた、西洋人男性実践者や、西洋人実践者と結婚した生まれながらのムスリムにとってのスーフィズムがもつ意味の分析については、今後の課題としたい。なお、2014年のシェキ・ナーゼムの死後、息子が教団を継承し、2015年にはスーフィー・チャリティ・ショップが閉鎖され、レイも亡くなった。これらのことで活動にも変化が考えられる。残された課題は山積みだが、本稿を皮切りに今後も調査を続けていきたいと考えている。

謝辞

本論は2012年1月21日に上智大学で開かれた、スーフイズム・聖者信仰研究会での発表原稿がもとになっています。『FAB』の匿名の査読者の方々からは大変有意義なコメントをいただきました。ありがとうございました。

<注>

- 1) 本稿において「イギリス」は、「グレート・ブリテン島および北アイルランド連合王国」、つまり、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4か国の連合体を指し、「イングランド」とは区別して用いている。
- 2) イスラームとスーフイズムの関係には、研究者だけでなく、地域や時代によってもさまざまな解釈があるが、本稿では、調査対象の実践者に合わせて、スーフイズムをイスラームの中の1つの流れとして捉えている。
- 3) 本稿における「西洋」とは、旧共産主義国でもムスリム国家でもない欧米諸国、つまり北米と西欧、オーストラリアとニュージーランドを指していて、「西洋人」とはこれらの地域のマジョリティである、いわゆる「白人」を指している。
- 4) イスラームにかかわる西洋人の中には、正式な手続きを得た「改宗」にこだわらない者も少なくない。そこで、本稿ではイスラームやスーフイズムにかかわる西洋人一般を指すときには、イスラームまたはスーフイズムの実践者、と表記している。
- 5) Doughty, Steve, 2011, Number of British Muslims will double to 5.5m in 20 years. *Daily Mail* 28th January 2011. (<http://www.dailymail.co.uk/news/article-1351251/Number-British-Muslims-double-5-5m-20-years.html> 2019年7月26日閲覧)。
- 6) The National Archives, 2014, Religion Data from the 2011 Census. (<http://webarchive.nationalarchives.gov.uk/20160105160709/http://www.ons.gov.uk/ons/rel/census/2011-census/key-statistics-for-local-authorities-in-england-and-wales/sty-what-is-your-religion.html> 2019年7月26日閲覧)。

webarchive.nationalarchives.gov.uk/20160105160709/http://www.ons.gov.uk/ons/rel/census/2011-census/key-statistics-for-local-authorities-in-england-and-wales/sty-what-is-your-religion.html 2019年7月26日閲覧)。

7) 「ニューエイジ」が指す範囲は膨大で、安易に使用すべきでないことは理解しているが、ここでは、1970年代に始まり1980年代から盛んになった、「基本的には「オルタナティブ」の領域に属するすべてのものを特徴づけるのに展開される」[Heelas 1998: 257] 運動という意味で用いた。

8) [Dobbs, Green and Zealey 2006: 74] をもとに筆者が計算した。なお、イスラームに改宗していないイギリス人のスーフイーの中には、国勢調査で自らの宗教を「イスラーム」と申告していない人もいると考えられるため、実践者数はもっと多い可能性もある。「その他白人」には、1990年代の内戦によって、イギリスに逃れてきたボスニア人が多いと考えられる。

9) 服装に注目した類似の研究として、[帯谷・後藤 2018]。

10) Somerset Intelligence, 2013, Census 2011 Briefing Note: Ethnicity, National Identity and Country of Birth of Somerset residents. (<http://www.somersetintelligence.org.uk/ethnicity-in-somerset-briefing-note.pdf> 2020年1月1日閲覧)。

11) [Dobbs, Green and Zealey 2006: 74] をもとに筆者が計算した。

12) ジッカとは、コーランや神の名を繰り返し詠唱することである。

13) シェイクとは、老人を意味するアラビア語だが、部族の長や宗教的権威をもつ者への尊称であり、スーフイー教団においては精神的指導者のことである。

14) イギリスでは、ロンドン以外ではバーミンガムとシェフィールドに信者が多い。

バーミンガムには南アジア系の若い男性信者が多いが、シェフィールドには南アジア系とともにトルコ人、カリブ系、白人の信者も多い。ロンドンでは、南アジア系、トルコ人、白人に分かれて実践が行われている[Nielsen, Draper and Yemelianova 2006: 105-106]。

15) この点について、シェキ・ナーゼムの秘書だったレイは、1980年代前半までは、ムスリムへの改宗を求めなかったが、それ以降はヨーロッパにスーフィズムが定着してきたこともあり、「スーフィーなら、ムスリムだ」と姿勢を変えたと述べている。

16) このチャリティは、継父がアフリカ専門の外交官だったレイの個人的ネットワークにもとづき、アフリカの数ヶ所で行われている。

17) グラストンベリーのグループにおいて、「マウリド」といえばムハンマドの生誕祭のみを指し、南アジアのように、聖者の命日祭を指すことはない。

18) キリスト教徒は町の中心部にそれぞれ教会をもっているため、墓地にあるチャペルを使うことはほとんどなく、当時はおもにイスラーム関係の集まりに使用されていた。

19) 第6章で説明するが、男女混合の集まりは、2009年末から2010年初めの数ヶ月間、ジッカとして木曜に、瞑想会として日曜に実施されていたが、2010年夏頃からは木曜のジッカに一本化された。

20) 総務省統計局 2018「世界の統計」(<https://www.stat.go.jp/data/sekai/pdf/2018al.pdf> 2019年7月26日閲覧)。

21) イギリスの国勢調査などの統計調査では、人種を記す際、「白人」「黒人／アフリカ系／カリブ系／黒人のイギリス人」というカテゴリーが使われているため、ここでも「白人」「黒人」と表記した。

22) レイは、グラストンベリーに隣接する村に住んでいて、正確にはグラストンベリーの町の住人ではない。しかし、レイは日中を店のあるグラストンベリーで過ごすことが多

いし、この村には医療施設はなく、商業施設もないに等しいため、村民はグラストンベリーをはじめとする周囲の町を頻繁に訪れる。そのため、レイもここでの対象者に含めた。

23) Glastonbury Trust homepage (<http://glastonburytrust.co.uk> 2009年5月28日閲覧)。

24) 「サーディ (Sadi)」とは、13世紀にトルコで活躍した詩人だと、グレースからは説明された。2012年1月のスーフィズム・聖者信仰研究会にて、この「サーディ」は13世紀のペルシャの詩人ではないかと教えていただいた。グレースの発言とも一致するため、そうだと考えられる。

25) 酔っ払いや麻薬常習者がつねにいるグラストンベリーは、子供の有無にかかわらず、環境がよくないと考える人もいる。一方、レイも暮らす、親子が引っ越したこの村は環境がよいことで知られるが、先述のように買い物に不便で、路線バスの本数も極端に少ないため、自家用車なしに暮らすことは、ほとんど不可能である。

26) ルースはキプロスに行きたいとは言っていないが、レイがシェキ・ナーゼムに会うべきだと、日ごろから強く勧めていた。

27) イギリスのキリスト教の教会では、ミサのたびに寄付ではあるが半ば強制的に献金が求められるし、正式なメンバーになると更なる献金が期待される。また、ニューエイジ系の集まりでも、定期的開催される実践の場合、少なくとも部屋代として3～7ポンド(約400～950円)は必要になる。

28) ケンの妻は、一時期夫とともにジッカに参加していたが、神の御名やコーランを複誦するスタイルが合わなかったため、参加しなくなった。詠唱を伴わない「瞑想会」にしたのは、彼女も参加できるようにとの配慮からである。

29) ただし、本稿で取り上げた女性たちが積極的に従おうとしている規律は、イスラ

ム法というより、シェイクからのメッセージである。ウェーバー流にいうと、合法的支配よりカリスマの支配の側面が強いといえる[ウェーバー 1970]。

<参考文献>

- アハメド、ライラ 2000 『イスラームにおける女性とジェンダー』 林正雄・岡真理・本郷陽・熊谷滋子・森野和哉訳、法政大学出版局。
- アブー・エルゴド、ライラ 2018 『ムスリム女性に救援は必要か』 鳥山純子・嶺崎寛子訳、書肆心水。
- ウェーバー、マックス 1970 『支配の諸類型』 世良晃志郎訳、創文社。
- 帯谷知可・後藤絵美 編 2018 『装いと規範——現代におけるムスリム女性の選択とその行方』 京都大学東南アジア地域研究研究所。(https://ciras.cseas.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2018/07/CIRAS_DP80.pdf 2020年3月26日閲覧)。
- 河西瑛里子 2015 『グラストンベリーの女神たち——イギリスのオルタナティヴ・スピリチュアリティの民族誌』 法蔵館。
- 工藤正子 2008 『越境の人類学——在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』 東京大学出版会。
- 後藤絵美 2014 『神のためにまとうヴェール——現代エジプトの女性とイスラーム』 中央公論新社。
- 酒井啓子 2003 「ナクシュバンディー教団」 片倉もと子編集代表『イスラーム世界事典』 明石書店、pp. 290-291。
- 東長靖 2001 「ナクシュバンディー教団」 大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編集『岩波イスラーム辞典』 岩波書店、pp. 698-699。
- 野中葉 2015 『インドネシアのムスリムファッション——なぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』 福村出版。
- 間野英二 2002 「ナクシュバンディー教団」 佐藤次高監修『新イスラーム事典』 平凡社、pp. 374-375。
- 嶺崎寛子 2015 『イスラーム復興とジェンダー——現代エジプト社会を生きる女たち』 昭和堂。
- 八木久美子 2007 「イスラーム」 田中雅一・川橋範子編『ジェンダーで学ぶ宗教学』 世界思想社、pp. 58-73。
- 吉田光宏 2009 「トランズナショナルなコンテクストで構築されるジェンダー・アイデンティティの力学」『神田外語大学紀要』 21: 61-97。
- Damrel, David W. 2006 Aspects of the Naqshbandi-Haqqani Order in North America. In Jamal Malik and John Hinnels eds. *Sufism in the West*. New York & London: Routledge, pp. 115-126.

- Dobbs, Joy, Hazel Green and Linda Zealey eds. 2006 *National Statistics: Focus on Ethnicity and Religion 2006 edition*. Basingstoke & New York: Palgrave Macmillan. (http://www.ons.gov.uk/ons/rel/ethnicity/focus-on-ethnicity-and-religion/2006-edition/index.html 2020年1月1日閲覧)。
- Draper, Ian K. B. 2004 From Celts to Kaaba: Sufism in Glastonbury. In David Westerlund ed. *Sufism in Europe and North America*. New York & London: Routledge, pp. 144-156.
- Gall, Dina le 2005 *A Culture of Sufism: Naqshbandis in the Ottoman world, 1450-1700*. Albany: SUNY Press.
- Geaves, Ron 2009 The Transmigration of Sufism to Britain. In Markus Dressler, Ron Geaves and Gritt Klinkhammer eds. *Sufism in Western Society: Global networking and locality*. New York & London: Routledge, pp. 97-112.
- Genn, Celia A. 2007 The Development of a Modern Western Sufism. In Martin van Bruinessen and Julia Day Howell eds. *Sufism and the 'Modern' in Islam*. London & New York: I. B. Tauris, pp. 257-277.
- Haenni, Patrick and Raphaël Voix 2007 God by All Means... Eclectic Faith and Sufi Resurgence among the Moroccan Bourgeoisie. In Martin van Bruinessen and Julia Day Howell eds. *Sufism and the 'Modern' in Islam*. London & New York: I. B. Tauris, pp. 241-256.
- Hammer, Olav 2004 Sufism for Westerners. In David Westerlund ed. *Sufism in Europe and North America*. New York & London: Routledge, pp. 127-143.
- Heelas, Paul ed. 1998 *Religion, Modernity and Postmodernity*. Padstow: Blackwell.
- Hermansen, Marcia 2004 What's American about American Sufi movements? In David Westerlund ed. *Sufism in Europe and North America*. New York & London: Routledge, pp. 36-63.
- Hermansen, Marcia 2006 Literary Productions of Western Sufi Movements. In Jamal Malik and John Hinnels eds. *Sufism in the West*. New York & London: Routledge, pp. 28-48.
- Howell, Julia Day 2007 Modernity and Islamic Spirituality in Indonesia's New Sufi Networks. In Martin van Bruinessen and Julia Day Howell eds. *Sufism and the 'Modern' in Islam*. London & New York: I. B. Tauris, pp. 217-240.
- Howell, Julia Day and Martin van Bruinessen 2007 Sufism and the 'Modern' in Islam. In Martin van Bruinessen and Julia Day Howell eds. *Sufism and*

- the 'Modern' in Islam*. London & New York: I. B. Tauris, pp. 3-18.
- Kettani, Houssain 2010 Muslim Population in Europe: 1950-2020. *International Journal of Environmental Science and Development* 1(2): 154-164.
- Nielsen, Jorgen S., Mustafa Draper and Galina Yemelianova 2006 Transnational Sufism: the Haqqaniyya. In Jamal Malik and John Hinnels eds. *Sufism in the West*. New York & London: Routledge, pp. 103-114.
- Scivi, Sara 1993 Documentation and Experience of a Modern Naqshbandi. In Elizabeth Puttick and Peter. B. Clarke eds. *Women as Teachers and Disciples in Traditional and New Religions*. pp. 77-89.
- Werbner, Pnina 2007 Intimate Disciples in the Modern World: The Creation of Translocal Amity among South Asian Sufis in Britain. In Martin van Bruinessen and Julia Day Howell eds. *Sufism and the 'Modern' in Islam*. London & New York: I. B. Tauris, pp. 195-216.
- Westerlund, David 2004 The contextualization of Sufism in Europe. In David Westerlund ed. *Sufism in Europe and North America*. New York & London: Routledge, pp. 13-35.
- Wheeler, Elisabeth 2003-2004 *Assignment: Investigating Glastonbury*. unpublished.

インターネット資料

スブド・ジャパン「スブドの歴史」

<http://www.subud.jp/cms/index.php/ja/about-subud-j/history-of-subud-j> 2019年7月26日閲覧。

総務省統計局 2018「世界の統計」

<https://www.stat.go.jp/data/sekai/pdf/2018al.pdf> 2019年7月26日閲覧。

Glastonbury Trust homepage

<http://glastonburytrust.co.uk> 2009年5月28日閲覧。

Somerset Intelligence 2013 Census 2011 Briefing Note: Ethnicity, National Identity and Country of Birth of Somerset residents.

<http://www.somersetintelligence.org.uk/ethnicity-in-somerset-briefing-note.pdf> 2020年1月1日閲覧。

The National Archives 2014 Religion Data from the 2011 Census.

<http://webarchive.nationalarchives.gov.uk/20160105160709/http://www.ons.gov.uk/ons/rel/census/2011-census/key-statistics-for-local-authorities-in-england-and-wales/sty-what-is-your-religion.html> 2019年7月26日閲覧。

(2019年11月14日受理)

Western Sufi Ladies: Case Study of the Naqshbandiyya Haqqaniyya Order in Glastonbury, UK

Eriko Kawanishi

Keywords

Naqshbandiyya Haqqaniyya Order, Western Sufi, Islam in the UK, Neoliberalism, Feminism

In the Western countries, the number of Muslim is increasing rapidly, and some Westerners are interested in Islam or converted to Muslim. However, scholars have rarely studied Western Muslims. In general, these Westerners are said to be attracted to Sufism as they regard it as one of the “New Age” matters. In this article, I focus on the Western women in Glastonbury, UK, who are the members of the Naqshbandiyya Haqqaniyya order. Why these women practise Sufism?

At first, I show that not all these women regard Sufism as “New Age”. Then I say that they accept the “passive” way of living, such as relying on men or others, following disciplines, and not needing the complete “independence” and “self-decision”. This idea is different from Neoliberalism, the idea of the mainstream Western society. These women find the meaning of their life through the interaction with others and manage to achieve a better way of life. They find current society is unstable because it addresses freedom too much. Their practice of Sufism is an alternative way of life to survive this society.